
魔法先生ネギま！ 世界の英雄

朝比奈幸人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 世界の英雄

【Nコード】

N2228X

【作者名】

朝比奈幸人

【あらすじ】

魔法世界にはある噂がたっていた。

曰く人を救い続ける正義の味方がいると。

魔法先生ネギまにFate／stay nightの設定を加えた作品です。

一応分からない方に説明を書くと思います。

英雄の始まり（前書き）

魔法先生ネギまにf a t e / s t a y n i g h tの設定を加えました。

英雄の始まり

俺は結局何がしたかったんだろう。

そう呟いた少年の名前はライト・ピース。
後の英雄であった。

俺は結局何がしたかったんだろう。

俺がしたかったことは分かっていた。

だがそれをする事など出来なかった。

したかったことは唯ひとつ、

皆が平和に過ごせるように、という願いだけだった。

だが、それを果たすことが出来なかった。

確かにいくらかの人は救った。

そのこと自体は悔いていないし誇りに思う。

ただ全てを救うことは出来なかった。

人質にされていた人達を助けたときもあった。

俺にはある程度の特珠な、人を救うことが出来る力を持っていた。
だが、それでも全てを助けることが出来なかった。

そのときは、一人を見殺しにした。

全体が助かるという方法は無かった。

だが、ほとんどの人を救うという方法があった。

その次は数人を、十人くらいを。その次はさて、何人だったか。
もう分からない。何人を助けて何人を殺したか分からない。

唯分かることは一つだけある。

オレはまた同じ事をするのだろう、という事を。

第一話 大分烈戦争（前書き）

なかなかのスランプでした。

第一話 大分烈戦争

大分烈戦争

メセンブリーナ連合とヘラス帝国の全面戦争。

それが始まってしまった。

「さてどうすべきか」

元から介入はするつもりだが未だかつてここまで大きな戦いはみることがなかった。

紛争なら指導者を倒すだけで後は楽だが国同士となれば話が違う。トップを殺したところでまた指導者が出てくるだけ。

「となれば」

後は現場で行動を起こすのみ。

方針はわかった。

ならばすぐに行動に移そう。

さあ始めよう。俺の戦いを。

ヘラス兵と戦っている時、ソイツは現れた。

「双方とも矛を納める気は無いか？」

何処からか現れたソイツはそんなことを言う。

「何言ってやがるんだアイツ」

そんなものあるわけがない。

何故なら俺達は自分で戦争に来てるんだ。
ハナからそんなもの持ち合わせていない。
周りの奴らもそうだと知っている。

「そうか。まあ期待はしていなかったしな」

そう、最初からあきらめたかのように言った。
次の瞬間

「ならば力づくで止めよう」

そう言った瞬間威圧感が増した。

動けない。動いてはいけない。

動いた瞬間に殺される。

そう思わせる程の威圧。

「へっおもしれえ」

だがそんなのでは止まらない。
強い相手と戦うのが目標なのだ。
なら今は好機。

「行くぜ！」

俺はそのまま飛び出した。

「まずは二人か」

連合国の方から赤毛の少年が飛び出てきた。

そしてその後ろを追うように真面目そうな侍風の青年が後を追う。

魔力は莫大という事はある程度は期待されているのだろう。
ならそれを潰す。

「行くぜ詠春！」

赤毛の少年はこちらへ向かってくる。

「うむ、分かった」

と詠春と呼ばれた男も来た

クリエイト
「創造、開始」スタート

この詠唱は己を変える呪文。
この間俺は何かを作るだけのものとなる。

クリエイト オフ
「創造、完了」

右手には剣が作られていく。

その剣は設計図^{幻想}をもとに魔力という概念を変えた剣。

故に——俺が折れるというイメージを持たない限り折れることは無い。

「行くぞ」

俺は赤毛の少年に向けて切り付けるが少年は避ける。

そのすきに詠春はこちらに切り付けるが俺は剣で受け止める。

強い。まだ少しも時間は経っていないがそれは分かる。

「よけろよ詠春。雷の暴風！」
ヨウイス・テンベスター・フルグリエンス

少年は無詠唱で雷の暴風を放つ。

今の状態では避けきれない。

ならば盾を造ろう。

「我世界の变革を求むものなり」

イメージするのは英雄アイアスが使った盾。

最速で世界へ潜りそして盾を引きずり出す。

ロー・アイアス
「熾天覆う七つの円環！」

七つの花卉が開く。

そして雷の暴風を受け止めた。

「ッ！」

口から出る苦悶の声。

盾を用意しても使用者が耐えきらねば意味が無い。
だがそれでも耐えた。

「はあああ！」

盾を二枚削ったところで止まった。

「流石バカみたいな魔力をつぎこんだ魔法だ。これを二枚削るとは」

いかに本物ではなく俺が造ったオリジナルとはいえ一枚一枚は城壁
並みだ。

つまり城壁を二枚も破ったことにほかならない。

だが後五枚残っている。

対して少年は結構な魔力を使いかなり疲れていた。

「ナギ！」

これ以上の戦いは不利と見たか詠春はナギと呼ばれた少年を抱えて
敗走した。

追うのは難しいし目標はだいたい達せられた。

ナギが敗走した。

その事実にかんりの兵士が逃げ出そうとする。

「どうした。かかってこないのなら私から行くぞ」

その挑発すら恐怖に思ったのか一斉に逃げだす。

此処の戦場では戦いは回避できた。

後に紅き翼のリーダーとなるナギと正義の味方は初めて此処で出会った。

第一話 大分烈戦争（後書き）

始動キーを変えました。

第二話 黒幕（前書き）

実はナギ達が活躍した所の原作を持っていません。
なのでだいぶ違ってるぞというところがあると思うので
どんどん指摘してください。

第二話 黒幕

何度何度も戦争を妨害したものの結局止められたのは最初の1回だけとなってしまう。

その理由は戦争へ介入しようとするとなぜ妨害してきたということだった。

それはまるで難攻不落の壁だった。

爆発する音が遠くで聞こえた。

それは恐らく魔法が当たった音だろう。

戦場はまだもう少し先にある。

不意にその男は現れた。

急激に体に走る悪寒。

その感覚の意味に切磋にこの場から飛んだ。

「っ！」

体が地面に転がった。

そして元いた場所に発生した爆発音。

「……」

爆風を受けて更に転がる。

流石に爆風までは回避できなかったらしい。

だがまだだ。

俺を狙った敵はまだ狙っている。

瞬時に体制を立て直すと物陰から男が出てきた。

その男は黒い外套を纏っている。
背は高くかなりの長身だ。

それはかなり煤けていてぼろぼろだった。

髪は灰色で色素が抜けかけたような色をしている。

顔は黒くも無く白くも無く、顔立ちは整っているだろう。

「死ななかったか。勘かあるいは抑え切れなかった私の落ち度か」

その声を聞いたとたん感じる威圧感。

勝てない。そう思わせるのに時間はかからなかった程に。

だが俺は超えなければいけない。

「クリエイト、オン」

己を変革する言葉

手に収まる長剣。

それによって斬りかかる。

「ハッ！」

だがそれは無論止められる。

だが、それは同じ剣によってだった。

見た目も変わらない剣。

だが、

ガラスが碎ける音がした。

それは俺が作り上げたものが破壊されたということ。

「なっ！」

そんな筈が無い。

同じ剣というだけでもおかしい。

何故ならその剣はかなり昔の時代の剣。

それが俺が造った剣と出会うはずが無いしましてや一方的に破壊された。

「っ」

反撃を後ろに下がり避けた。

「どうした。それでお終いか」

俺はその答えに答える術が無かった。

俺には敗走しか許されなかった。

何度戦う方法を変えても敵わなかった。

しかも厄介なのは所属が分からないということだ。

連合でも帝国でもない。

まさしく正体不明な組織。

しかも常に監視をしているのか戦争している付近へ近づくときソイツは現れるのだった。

その理由は推測だが戦争を終わらせないためだろう。

何故なら連合が優位に立つと今度は帝国が優位に立ちさらにという風に何度もまるで

管理されているような戦いだったからだ。

それにかかなりの功績を挙げたはずの紅き翼もかなりの辺境へ追いやられていた。

戦争を長引かせる理由は分からない。

だから今度はその組織と思われる情報を集めていった。

結果としては連合と帝国の上層部なども所属している完全なる世界だということが分かった。

誰が予想しただろうか。

まさか連合と帝国の上層部が結託していたなんて。

だが、その事実を知ったと共にその存在に気付いた存在もいた。

戦争を終結するためにはきつとその人の存在がかかわってくるだろうと思う。

なので会うことにした。相手の許可もなしに。

というか通常の手段では合えないのが普通だろう。

——アリカ姫には。

「……」

時刻は夜。

俺は息を殺しながら天井裏を進んでいた。

目指すはアリカ姫の寝室だ。

しかしこれでなかなか見つからないものだった。

一応とはいえ自らの魔力を見つけづらくなるマントは着ているものの。

やはり侵入者を見つけるのは魔法に頼っているのかもしれない。

「…ここか」

どうやら無事に寝室の上に着いたようだ。

俺は定位置を決めると紙に文字を書いた。

書き終わったときちょうど入ってきたようだ。
この部屋の持ち主が。

「しかしどうしたものか」

恐らくは姫の身の回りの世話をする従者が出て行くため息をつきながら悩んでいた。

俺は部屋へ紙を落とした。

「しかしどうしたものか」

従者が出て行くと同時に思わずため息が出た。

今悩んでいる事柄、それはこの戦争を裏で仕切っているであろう組織についてだった。

考えても答えが出てこない問題。

どれほどの組織か、誰が所属しているのか。

何一つでてこない。

「?」

紙が落ちてくる。

ソレを拾うとそれには何か書いてある。

『決して声を出さずに読んでください。』

姫は今起こっている戦争を裏で操っている組織をご存知だと思われます。』

「っ！」

成程、自分以外にも裏の組織について知っているものがいたのか。しかもどうやら敵ではなさそうではある。

読むのを再開する。

『ですがそれについては絶対に話してはいけません。

私が調べた中では連合の上層部にその組織に所属している人がいます。

間違えていなければ恐らく今のナンバー2すなわち――』

――執政官。メガロメセンブリアのナンバー2の執政官がまさか。

『ですので一度あなたと話し合いたいのです。』

話し合いたい、か。

何が飛び出してくるのかは分からないがとにかく話し合わなくてはいけないだろう。

全く会うのが楽しみになってきた。

第二話 黒幕（後書き）

アリカ姫が書きにくいです。
こういうかんじであってますか。

第三話 王族との邂逅

アリカ姫はどうやら驚いているようではあったがすぐに切り返しそのメモを読んだ。

そして読み終わると天井、すなわち俺がいるほうへ目を向けた。

「其処の者、その組織の対策をするのは早めの方が良からう？」

そう訪ねてきた。

意外ではある。普通ならもっと驚いてもおかしくは無い。

これは声を出さないといけないか。

「そうですが」

出来るだけ声に特徴をださないように。

抑揚の無い答えを返した。

「なら降りて来い。幸い今なら人目も無いぞ」

は？

予想を超えた答えに頭は一瞬止まった。ついでに呼吸も。

だが確かにその答えは早い方が良さだろう。

念のため誰にも魔法を感知されないように人払いと防音の結界を張る。

そして天井から部屋へ飛び降りた。

下にはかなりの厚さの絨毯によって思ったよりの衝撃は無い。

前を見ると人払いを張ったのが分かったのか驚いている姫を見た。

「お主結界を張るのに長けていたのか？」

「まあそれなりにですが。まあそれはいいとして単刀直入に申しませんが

貴方はどれ程の事を知っておられますか」

「分かっていることは数少ない。何が目的かもどれほどの人数かもまた組織の名すらも」

それは少なすぎる、いや具体的には何一つ分かってもいないということ。

だがそれだけでも組織の存在に気付いたということか。

「成る程。では申し上げますがその組織の存在は完全なる世界。目的も不明。

人数はまだ分かってはいませんが連合と帝国両国の上層部に所属している人がいると思われます」

「何じゃと！？ それではこの戦争はまさか…」

絶句する姫。

絶句するのも無理がない。否、絶句しなければいけない。

何故なら民が命を懸けて戦った一戦争が全て手のひらの上だったのだから。

つまりその組織はどちらを勝たせるも負けるかも決めれさらには民の命も駒としかみてはいないのだから。

だからこそ

「倒さなくてはいけない組織です。その組織を潰さない限り戦争は終わらない」

それは、多くの命が失われるということは最も正義の味方が阻止しなければいけないことだから。

話を聞いて考え込んだ姫はようやく顔を上げ結論を出した。

「そうじゃな。ならばお主にはわが国の相談役になってくれ」
は？

本日二度目の衝撃が頭にクリーンヒットする。
でも考えてみれば公的に会える存在ではあるだろう。
流石に何度も会うのは難しくなるだろう。
だが

「この話を信じるのか？」

それだけが腑に落ちなかった。
確かに組織の存在は疑ってはいたが上層部にその組織のものがいるとは思ってもいなかっただろう。

「なにその話をするお主のそんな——」
——哀しげな顔を見ればな。
その言葉で言葉が締められた。

そうか。俺はそんなに哀しいと思っていたんだ。
人の命が今も刻々と失われていく今この状況を。
初めて会った人に信じられる程度に哀しかったんだ。

「どうするのじゃ」

姫は俺にその答えを求めた。
俺は

「これからよろしく頼む。アリカ姫」

ありのままの答えを返した。

第四話 その背中はきつと（前書き）

ようやく書けました。

遅くなってしまうてすいません。

第四話 その背中はきつと

明かりが煌々と照らされる。

生簀の中には魚が何匹も優雅に泳いでいた。

それは知る日とぞ知るオスティアの釣り屋。

普段ならば平和や穏やかさを象徴する場所だがそこは――

「おっと、十八匹目フィィィィッシュ！」

「なっ！？　ならこっちは十九匹目だ！」

――戦場と化していた。

釣り場に満ちるそれは対抗心だった。片方は赤毛の男、もう片方は黒髪の男だ、

そしてそれはナギ・スプリングフィールドとライト・ピースがいがみ合っていることをあらわしていた。

俺たち紅き翼はかなり有名になっていた。

ガトウとタカミチも仲間になった。

そして今は協力者と会うために本国までやってきた。

「協力者は一体誰なんだ？」

「それはこちらにおられる…」

「マグギル元老院議員！？」

「いや、わしちゃう。そちらにおられるウェスペルタイア王国アリカ王女とその相談役じゃ」

そういわれてそちらへ目を向けた。

全く気付かなかったが確かにいた。金髪の姫さんが。見惚れるほどの美しさだと思う。

だが気になったのはその後ろの――

「!？ お前、まさか」

その後ろの男は見覚えがある。いや見覚えがあるなんてレベルじゃない。

「ああそうだ。お前とその、剣士には一度会ったはずだ」

こいつは俺が始めて勝てなかった相手だ。

勝ち負けで言えば負けではない。だが勝てはしなかった。

「何故お前が!？」

「別に今は俺の事などどうでもいいだろう？」

その言葉に周りを見た。

その場にいた俺の仲間ほとんどがついていけなかった。

「そなたが紅き翼のリーダーか？」

と――蚊帳の外にいた姫さんが突然尋ねてくる。

「ああ、俺がナギ・スプリングフィールドだ」

胸を張って堂々と答える。

それは俺の誇りだから。

故に堂々と答えた。

「そうか。アリカ・アナルキア・エンテオフユシアじゃ
名乗られたからかその返答のようにその名を名乗った。」

「京都神鳴流剣士・青山詠春です」

「フィリウス・ゼクトじゃ」

「アルビレオ・イマです」

それぞれが名乗り始めた。

「俺は傭兵のジャック・ラカンだ！」

だが何故かラカンが名乗った途端、

「気安く話しかけるでない下衆が！！」

と怒鳴った声を放たれる。なんでだ。

だがそんなことよりも今は優先させるべきことがある。

「俺はライト・ピースだ」

コイツのことだ。

自己紹介が終わり今後のことを話し合った後、俺は思い切って

「おいオマエ。俺と勝負しろ」

勝負を仕掛けた。コイツのことを知るために。コイツの本心を知るために。

そして冒頭へ至る。

流石に戦う事は却下されたのでちょうど人があまりいなかった魚釣り屋に入ることとなった。

それがいけなかったのかもしれない。

最初は冷静にどこから取り出したかなり凄そうな釣具を取り出し釣っていたのだがこちらが対抗していたらいつのまにかこんな有様だ。

仲間は最初はいたものの結局どこかへ行ってしまった。きっと見たくないことがあったのだろう。

結果一時間で俺とアイツは百匹という破格の数をたたき出しその釣り屋からは永久に入れなくなった。

釣り屋の親父が俺達が帰ろうとしたときの言葉が「もうやめてくれ」だったからな。

涙目と共に。

帰り道、夕日が射す中気まずい空気を醸し出しつつ俺たちは帰っていた。

「お前は何のために戦う？」

それを言い出したのはライトだった。

「俺は唯自分の力を試したかったただけだ」

それは俺の本心だった。

「そうか。俺は多くのものの命を救いたかった」

突然の独白。

「だけど全てを救う事などそれこそ神様にしか出来なかった」

それを語ったそいつの顔は疲れきった表情で夢が破れた顔だった。

「だから俺は九を助けるために一を助けなかった。九十九を救うために十を切り捨てた」

それを聞いて不思議に思った。

「ならなんでオマエはそれをやめないんだ」

そいつの顔は酷く哀しい顔をしていた。だから疑問に思った。なら何故それをやめなかったんだろう、と。

やめれば楽になれたかもしれないのに。

切り捨てる、それは恐らく見殺しにしたのだろう。もしくは――文字通り斬り捨てたのかもしれない。

それは俺には許せないことだ。でもそんな事はいちばんこいつが思っているだろう。

ならば何故それを続けた。

ライトは内ポケットからかなり表紙がぼろぼろになっている手帳のような物を取り出し

「これは俺を助けた人のものだ」と語った。

「俺を助けた人はきっと本気で正義の味方になろうとしたのだろう」

「その人はある時、とある村が悪魔によって襲撃される事を知った。当然知ったからにはそこへ駆けつけた。無論その原因を綿密に調べて。」

その原因はある家の魔法だった」

「その家は他の魔法と比べると異質すぎる魔法を継承していた。とはいえその魔法を使えたものはほとんどいなかった」

「だが、その家に生まれた子供はその魔法を使えるらしいということがわかった。そのためその力を悪用しようとしたものが悪魔を召喚して村自体を襲った」

「その正義の味方はその原因たる子供を殺そうとした。でもいつもの出来ていたその行為が何故か出来なかった」

「だからその人は必死に悪魔と戦った。だけどその力は微々たる物で悪魔を追い払うことは出来たが村の人は救うことが出来なかった。そして自らも致命傷を負った。

だがその子供は生き残った。生き残ってしまった」

「だからその子供はその人の後を継いだ。だからこそ――」

「——その子供はやめることが許されないのだ」

長すぎた独白。語るべきことが終えたような顔。
俺は語られた事実に対し何も言葉が出なかった。

「ではな」

通り過ぎていくアイツの背を見ながら俺は正義の味方を考え続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2228x/>

魔法先生ネギま！ 世界の英雄

2012年1月14日18時48分発行